論説

明治理科教科書執筆者としての「中川重麗」事績：明治 20 年まで

渡　辺　陽　子
安　部　清　哉

1　はじめに

中川重麗の生涯を概観すると，ドイツ語翻訳者，教科書執筆者，教師，ジャーナリスト，俳人，美学者など，実に多彩な分野で活躍している。中川四明という名で俳句を発表し，俳句雑誌『懸葵』の創刊に関わり，正岡子規と交流を持つなど俳人として知られている。また，『平言俗語 俳諧美学』『形以神韵 触背美学』を著わし，美学者としても有名である。さらに，中川霞城，霞城山人などの筆名で翻訳や少年向けの記事の執筆を新聞紙上に発表するなど，文筆家としても活躍した多彩な人物である。その経歴の最初期である明治 10 年代には，『博物学階梯』などで自然科学関係の複数の理科教科書を執筆しており，明治初期における自然科学分野語彙の発展に与えた影響は少なくないと思われるが [1)]，理科教科書執筆者としての中川重麗の経歴と事績は十分に注目されていない。近代語研究においては，明治初期は，近代的科学知識の受容のため，漢語の試行錯誤がなされていたが，必然的に近代科学の新概念についての説明を必要とする理科教科書は，新しい漢語の産出・発展・衰退が観察できる点で，近代語研究のための大変価値ある資料である。中川重麗が執筆，編集に関わった理科教科書で使用した語彙の中には，『日本国語大辞典 第二版』において初出例とし

て挙げられている語彙もあるが，中川がどのように近代的な新しい語彙を得て，それを教科書に使用していったのか，彼がその科学知識をいつ，どこで，どのようにして得ていったのかということを中心にした経歴の整理はまだ十分になされていない。本稿では，理科教科書執筆者としての中川重麗に焦点を当て，科学知識と語彙がどのように獲得されたのかを明らかにすることを目的に，まずは理科教科書に従事した時期の中川の経歴・事績について，先行研究で提示されたものを比較し，整理した。

2　先行研究と本稿における中川重麗経歴の区分

中川重麗について，その経歴と事績をまとめた先行研究はいくつかあり，その中で中川の年表が作成されている。最も古いものとしては，1917年刊行『懸葵』第14巻第5号（故四明翁追悼号）の「故中川四明翁履歴」であり，最も詳しいものは清水貞夫の『俳人四明覚書』のシリーズであるが，本稿で主に参照したのは『俳人四明覚書　参』（1996）の「四明中川重麗略年譜 – 主に文筆活動のこと」と『俳人四明覚書　四』（2007）の「四明中川重麗略年譜」である。また，根本文子（2011）「中川四明年譜考証」でも年表で中川の経歴が示されているので，これも参照した。年表整理において，以上の資料を基礎資料としたものについて，本稿では以下のように表記することとする。

① 【清水】:『俳人四明覚書　参』及び『俳人四明覚書　四』
② 【懸葵】:『懸葵』第14巻第5号（故四明翁追悼号）
③ 【根本】:根本文子「中川四明年譜考証」

三種類の資料を比較，整理した年表資料を5章に示す。

以上は，本稿で年表を作るために直接使用した資料であるが，それぞれについて特色を述べると以下の通りである。清水の『俳人四明覚書』は，清水が調査した中川四明に関する資料を整理して掲載しているほか，文芸

誌『流星群』に掲載した「四明について」と題した記事を収録したものである。複数の巻で年表が作成されており，『俳人四明覚書　続』は略年譜，『俳人四明覚書　参』は文筆活動についての詳細な記載がある出生時から没年までの年表，『俳人四明覚書　四』は出生時から没年までの年表，『俳人四明覚書　五』は，京都画壇関連事項について明治 21 年から大正 8 年までの年表が収録されている。『俳人四明覚書　六』では，文芸界関連事項について明治 23 年から大正 6 年までの年表が，『俳人四明覚書　七』では美学美術史関連年表が収録されている。また清水は『四明中川重麗小事典』（2015）も刊行しており，中川の生涯に関連する事項の解説がなされている。

『懸葵』は，明治 37 年創刊の俳句雑誌である。中川が新聞『日本』俳句欄に俳句を投稿している俳人らに呼びかけて句会を催していた満月会の機関誌で，1917 年発行の，『懸葵』第 14 巻第 5 号は，故四明翁追悼号として中川の履歴のほか，中川について知る俳人らが寄稿したものとなっている。

根本文子（2011）「中川四明年譜考証」は，清水と同じく俳人中川四明としての中川重麗に注目し，中川の経歴と，その中での正岡子規との交流について整理されている。これらはいずれも俳人としての中川を研究対象としたものであり，その関心は中川の経歴の後半，俳人として活躍した頃に向けられている。

なお，中川は明治 20 年代において年少者への科学啓蒙を目的とする少年科学ジャーナリズムの世界での著述業で活躍し，この時期の中川の業績を整理したものとしては，東徹（1987）「明治中期の少年雑誌における科学ジャーナリストの役割：中川重麗の場合」が詳しいが，本稿で焦点をあてる中川の事績からは外れるため，年表作成では取り上げなかった。

また，教育者としての中川重麗についての人物研究としては京都薬科大学の鈴木栄樹が先行している。中川が京都薬科大学の初代校主であること

から，中川についての研究成果を発表しており，清水や根本が主に俳人としての中川に注目しているのに対して，俳句の世界に入る以前の中川について詳しく調査している。教育者としての中川に注目しており，本稿と同一の関心を寄せていると思われる。鈴木の「京都私立独逸学校の初代校主中川重麗（四明）：忘れられた近代京都のマルチタレント」（2019）が中川について述べられている資料として最新のものである。

本稿では，中川重麗の経歴の前半，理科教科書の出版が集中した明治10年代までを中心に，中川重麗と交流があった人物，コミュニティを整理して，彼の科学知識の背景を明らかにすることを目的として，先述の資料【清水】【懸葵】【根本】による経歴，事績の比較と整理をした年表を作成した。本稿にあげる中川の年表に記載する内容は，生年の嘉永3年から明治20年までとした。これは，明治19年に第一高等中学校を非職になり，明治20年以降は，新聞社に活動の場所を移して，記事を発表していくためである。

本稿で取り上げる明治初めから明治20年までだけに限ってみても，中川を取り巻く環境と，そこで残した業績はいくつかの段階に分かれて変化が見られる。ここでは「変化」を基準にして，明治初め頃から明治20年までの中川の経歴を以下の三つの段階に分けることとする。

表1　中川重麗経歴の区分（明治20年まで）

【Ⅰ期】	嘉永3–明治7 1850–1874	幼少期の武士階級の一般的な素養の育成から，一転してドイツ語学習へ邁進した時期
【Ⅱ期】	明治8–明治16 1875–1883	京都府職員として，勧業課や学務課に勤務し，師範学校で教諭を兼務する時期
【Ⅲ期】	明治17–明治20 1884–1889	東京大学予備門の教員を務め，教師を辞めるまでの期間であり，これまで活動のフィールドとしていた教育現場から離れジャーナリズムの世界へ活動の場を移していった時期

3　中川の科学知識の源を探る：ドイツ語と中川重麗

中川が明治 10 年代に理科教科書執筆者として複数の教科書を発行できたのはなぜか。彼の経歴を考えれば，彼自身は科学の専門家ではなく，それによって身を立てていない。『博物学階梯』などの理科教科書の執筆にあたっては，原典をそのまま訳したのではなく，情報を取捨選択した上で，一つの理科教科書として編集したものと考えられる。それを可能にするためには，科学知識と，当時の最新の科学翻訳語の知識，卓抜したドイツ語能力が必要となる。では，教科書執筆に必要なだけの科学知識をどのように，どこで身につけたのかという点について，中川の経歴からみていく。

4　中川重麗の経歴：明治 20 年まで

4－1　【Ⅰ期】嘉永 3–明治 7（1850–1874）　武芸と詩文からドイツ語へ

まず【Ⅰ期】についてみる。中川の幼少期であるが，中川は嘉永 3 年に京都西町奉行下田耕助の二男として生まれ，生まれた月に二条城番組与力，中川重興の養子となる。武芸馬術を養父重興に学ぶほか，衣棚御池の大亦墨隠の家塾で詩文を学んでいる。年表【清水】では嘉永 3 年に「文芸は衣棚御池の大亦俊（墨隠）に就く」とあるが，大亦墨隠[2)] は儒学者，また書家であり，妻は南画の名手として夫婦ともに知られた存在であったという。大亦俊は墨隠の息子で，俊も明治 5 年から家塾を開き支那学を教授した（清水 2015：49）。中川が通った時期を鑑みると，中川は墨隠の家塾に通っていたと考えられる。

その後，文久元年には与力見習いとして役目に就いている。その後は京都見廻組，京都平安隊（後に警固方へ改称）での役目などに就く。転機となるのは明治 3 年で，7 月に東京へ遊学し，安井息軒の三計塾で学ぶが，12 月には普仏戦争の状況を知り，京都に戻って，翌明治 4 年には欧学舎

に入学しドイツ語を学び始めた。

中川は 1915 年発行の月刊獨逸語雑誌『Hand in Hand』の第 3 巻第 3 号，第 3 巻第 5 号，第 3 巻第 7 号に「京都に於ける獨逸學」という題名の記事で，京都でのドイツ語学習の思い出を振り返っており，中川がどのような環境でどのような思いでドイツ語を学んでいたかを窺い知ることのできる資料となっている。ドイツ語との出会いをもう少し詳しく知るために，中川自身の述懐を以下に引用する。以下の記述からは，明治 3 年に東京へ遊学したときの，中川の周辺の，洋学及びドイツ，ドイツ学，ドイツ語への関心の高まりがわかるだろう。

> 「漢學はモウ駄目だ，洋學をと勧める友人があって，英學を学ぶこととし，築地の福澤先生の處へ通ったが，まだ畳の上で，机に坐って，變則風に，地理書から，ホワット　イヅ　エヘミシヘールスなんか唐人の寝言のようなことを習い，神田明神の近傍に下宿をしておったが，その冬，日蔭町の某書店から普佛戰争日誌を賣出した。これが半紙に木版彫刻摺りで，太政官日誌と粗ぼ同じような體裁に出来ておった。ナポレオンで名高い，象山の長篇の詩で殆ど暗記しておったナポレオンの其の第三世が脆くも敗北したので，ゼルマンとか，獨逸とか云う餘り聞き慣れない言葉が俄かに評判物となり，獨逸學を學ぶが好いなど言うものもあった。」
> (中川重麗（1915)「京都に於ける獨逸學（一)」『Hand in Hand』第 3 巻第 3 号，p.28)

ドイツ語学習への動機は前述の中川の述懐から推察されるように，当時の時勢の流れに沿ったものと考えられるが，三計塾での学びとそこでの塾生との交流がその後の中川の事績に与えた影響は大きかったに違いない。東京遊学中，三計塾での中川の交友関係について，だれとどの程度の交流

があったかは不明であるが，当時の三計塾について，古賀勝次郎の「安井息軒の生涯 - 安井息軒研究（2）-」（2007）で，その門下生の一部が列挙されている。それによれば，息軒の門下のうち後に活躍した人々を①政治家・軍人，②学者・教育者，③裁判官と大別している。それぞれ氏名が挙げられているので，以下に引用する。「①には，谷干城の外，陸奥宗光，品川弥二郎，三浦安，河野敏鎌，神鞭知常，井田譲，明石元二郎，井上毅，大東義徹，石本新六などが，②には，川田剛，小中村清矩，山井清渓，亀谷省軒，昭井小作，安藤定，松本豊多，相馬永胤，渋谷牀山，星野恒などが，③には，三好退蔵，増戸武平，小野篤次郎，柳田真平，手塚賢太郎，中尾捨吉などが，いる」（古賀 2007：9）。古賀の挙げただけでも，後に活躍した人々がこれだけいる中で，三計塾で学んだ頃に中川と交流した人物の氏名や経歴を明らかにするためには，三計塾塾生らの塾在籍時期や，塾生のうち書簡や日記を残した人々の記録を詳細に見ていく必要があると思われる。

また，古賀の「安井息軒の門生たち（1）- 井上毅 : 安井息軒研究（6）」（2009）では，三計塾について，「表向きは漢学を学ぶ三計塾ではあったが，時勢の波は同塾にも押し寄せ，塾生たちもいやがうえにも，西洋の学問や事情に関心を持たざるを得なかった。儒教や『管子』などについては息軒に学ぶところ大きかった井上も，西洋の学問や事情に関しては，塾生たちから色々耳にし得たであろうことは容易に推測できる」（古賀 2009：43）とあり，当時漢学塾で学ぶ各地の武士階級の青年らにとって，西洋の学問や事情にどう相対すべきかは，差し迫った課題であったに違いない。

東京から戻った中川は明治 4 年から欧学舎の独逸学校でドイツ語を学び，明治 7 年まで学び続けた。欧学舎は，ドイツ語を学ぶ独逸学校，英語を学ぶ英学校，フランス語を学ぶ仏学校の総称である。この欧学舎独逸学校にて中川はルドルフ・レーマン（Rudolph Lehmann，1842–1914）[3] に指導を受けた。レーマンは明治 2 年に来日し，明治 3 年には欧学舎独逸学

校の教師として京都府に雇われる。欧学舎での担当科目は英語，独語，数学であった。レーマンが独逸学校へ来たのは，中川が東京から京都へ戻り，警固方(平安隊が改称したもの)で務めていた頃である。維新後，明治に入ったとはいえ未だ外国人に対する傷害事件が起きる恐れがあったため，中川はレーマンの護衛として傍に付き従いながら学んだのである。この頃についても中川は以下のように振り返っている。

> 「わたしは平安隊の護衛として，レーマン先生に學ぶ機會を得たのである。尤も志願をして護衛の一員に加わり，猿の檻のような處に，同僚と師の出入を監視し，外出にも護衛として附随する，公餘を以て教場に出て，アベチェを學び初めたのであった。」
> (中川重麗（1915)「京都に於ける獨逸學（一)」『Hand in Hand』，第 3 巻第 3 号，p.28)

護衛として任務に就き行動を共にしながら，レーマンからドイツ語を学んでいたということで，接触する時間も相応に多かったのではないかと思われる。

レーマンは欧学舎で授業をしながら独和辞書編集作業に取り組んでいた。このことは飛田（2007：1083–1084）に記載があり，それによれば，明治 4 年欧学舎から『独逸語学篇』，『ABC 書』が刊行され，辞書としては『和譯獨逸辭書』が出ていた。これらの辞書の編集作業にはレーマンの門下生が関わっており，中川もこれに加わっていたであろう。辞書編集に取り組んだ時期が，明治 4 年から明治 6 年とすると，中川の欧学舎在籍時期とも重なるため，この辞書編集作業が中川のドイツ語獲得に大いに役立ったであろうことは想像に難くない。明治 6 年には独逸学校（欧学舎）舎長心得となっているが，これに関しては抜擢の背景や理由がわかる資料を発見できていない。心得がつくので本来なるべき位階にはなく，仮にもしく

は一時の任用だった可能性があるものの，それでも中川の能力や人柄が評価されたものであると考えられる。

4－2 【Ⅱ期】明治 8–明治 16（1875–1883） 京都府職員から教師へ

明治 7 年までで，独逸学校での学習を終えた後，明治 8 年に，京都府の勧業課に勤務し，明治 9 年には中川は京都府庁学務課の職員になっている。明治初年以降，学校制度の整備が試行錯誤されていたが，各地の教育機関の監督を担う部署として，設置されたのが府県の学務課である。学務課については，神辺靖光（2007）によると，「廃藩置県直後の「県治条例」では県庁は庶務，聴訟，租税，出納の 4 課で学校事務は庶務課が担当した。だが，小学校の開設，就学督促が喫緊になったので府県は庶務課の中に学校掛もしくは学務掛を置いて対応した。これが 75 年に学務課に昇格独立し（一時期第五課と称した），地方の教育行政局として盛大な力を持ち後世に続くのである」（神辺 2007：2）

とあり，明治 8 年に学務課として昇格独立した行政局であり，中川は明治 9 年から学務課所属になっているので，新設の課の職員として任じられたようだ。同年 6 月には学務課所属のまま師範学校の理化学担当教諭となっている。他にも学務課職員として，明治 10 年 12 月 6 日に，旧仙洞御所の軽気球飛揚にも関わる。この頃の中川は，京都府発行の『萬有雑誌』（明治 10 －明治 11）や『物理雑誌』（明治 9）[4)]，『日月地球渾転儀用法』（明治 10），『小学読本博物学階梯』（明治 10）など理科雑誌の発行と，理科教科書の執筆に従事している。さらには「一方で余暇を利用して，私塾「萬有家塾」を開設し，独逸語，理化学，数学を教え，理化学思想の普及も力を注いでいた。」（清水 2015：65）とあるように，年表で【Ⅱ期】とした段階が，京都府職員として科学知識啓蒙と科学教育推進の時期であるといえる。この「萬有家塾」について，具体的にどのような内容をどのような

人に教えていたかは不明である。私塾まで開いていたということで，中川自身の科学知識の普及への情熱もあったのは間違いないが，軽気球飛揚に関わった勧業政策を推進した明石博高をはじめ，学務課においても科学知識普及と教育整備に対しては組織的に熱意をもって臨んでいたものと思われる。そうした環境に職員として身を置くことで，中川自身の知識もより磨かれていったのではないか。【Ⅱ期】の明治 11 年には，ドイツ人ゴッドフリート・ワグネル（Gottfried Wagener，1831–1892）が，京都舎密局と医学校で教えるために京都へ招かれ，京都舎密局で勤務するワグネルの通訳には中川があたっている。小澤（2015）『お雇い独逸人科学教師』によると，ワグネルは舎密局で，研究生に対して講義したが，その講義内容は教科書として後に出版されている[5)]。医学校では一般理化学を教えており，その教え子には，「現在の京都薬科大学の草創期に活躍した小泉俊太郎（1855–1937），上田勝行（1857–1903），喜多川義比（生没年不明），香山晋二郎（生没年不明）などがいた」（小澤 2015：107）とあり，ここでは名前が挙がっていないものの，通訳の仕事の傍ら中川もワグネルに教えを受けた可能性は高いと思われる。執筆した理科教科書が集中した【Ⅱ期】は，中川自身が精力的に知識を獲得し，それを教科書執筆によって還元していた時期であり，中川の科学知識，および語彙の拡大と精査がなされた時期だといえる。中川は私塾を開くなどしていることから，科学知識の普及に個人的な使命感もあったのは確かであるが，京都府職員の職務として，理科教科書執筆に関わっていたのが，この時期に教科書発行が集中する理由であろう。京都振興に精力的に取り組んだ槇村正直府知事，明石博高らを代表とする京都府行政のトップによる推進力と，それを支えた中川を含む京都府職員たちの働きが，明治初期京都の科学知識及び近代語彙の普及に与えた影響は大きいものであったと考えられ，この時期の京都府行政に関わる人たちの交流と事績を丁寧にみていくことが，今後さらに必要である。

4－3 【Ⅲ期】明治 17–明治 20（1884–1889） 教育からジャーナリズムへ

中川の科学知識の基盤を築いた頃の恩師であるレーマンは，明治 15 年には東京外国語学校のドイツ語教師となり東京へ移った。これを機にレーマンの教え子らによるレーマン会が発足した。その後，明治 17 年に私立独逸学校が設立される。これは現在の京都薬科大学の母体となった学校であり，中川はその初代校主となっている。さらに，同年 9 月には東京大学予備門御用掛となって教員勤務となった。この人事には，東京に移住し，同じく東大予備門で教えていたレーマンの口添えがあったものとされる（清水 2015：71）。明治 19 年 5 月に東大予備門が廃止となり，第一高等中学校教諭となったものの，同年 6 月には職を離れている。この時期は教育に集中していたのか，教科書執筆を必要とされなかったか，中川による理科教科書は発行されなくなる。

5 理科教科書執筆者としての中川重麗年表

以下，【清水】，【懸葵】，【根本】の三資料を比較整理した年表資料について述べる。比較の基準としたのは【清水】である。【懸葵】，【根本】は参照として横の行に並べた。年月日についても，【清水】を基準とし，【懸葵】または【根本】で，異なる場合は，（）に年月日を入れて示した。内容についても，【清水】と記載が異なる場合は【】に注記した。【清水】は，『俳人四明覚書　参』及び『俳人四明覚書　四』から作成したが，経歴については『俳人四明覚書　四』の「四明中川重麗略年譜」から主に作成し，著作に関する記載は『俳人四明覚書　参』の「四明中川重麗略年譜―主に文筆活動のこと」から引用し，年表の中では（）に入れて記した。『俳人四明覚書　四』の「四明中川重麗略年譜」になかった記載は，網掛けにして示した。日付は算用数字で表記するが，年表の内容本文については三資料での表記を生かし，月日等の数字を漢数字で表記している。

表２　理科教科書執筆者としての中川重麗年表（明治 20 年まで）

区分	年号(西暦)	月	日	年齢	清水	懸葵	根本
【Ⅰ期】	嘉永３年 1850	2	2	—	京都町奉行組与力、下田耕助の二男に生まれる。	生下田耕助次男	京都二条々(ママ)番屋敷に、下田耕助の二男として出生。
	嘉永３年 1850	2	15	—	二条城番組与力、中川重興（藤次郎）の養子となる。	北城番組與力中川重典ニ養ハル	北城番組与力、中川重興（藤次郎）の養子となる。
	嘉永３年 1850	—	—	—	幼名は勇蔵と称し、のち登与蔵と改める。	【明治２年に記載あり】	
	嘉永３年 1850	—	—	—	武術は養父藤次郎が師範、文芸は衣棚御池の大亦俊（墨隠）に就く。		
	文久元年 1861	5	—	11	二条城番組与力見習勤となる。	【明治２年に記載あり】	二条城番組与力見習勤務となる。
	文久２年 1862	—	—	12	この頃、所司代書院前での、稽古場剣術世話役となる。	【明治２年に記載あり】	この頃、稽古場剣術世話役申し渡される。
	文久３年 1863	3	4	13	徳川 14 代将軍二条城に入る。この頃、北大手門の警備に就く。		
	元治元年 1864	7	19	14	蛤御門の変で、京都市中大火となり二条城も類焼し、消火活動に追われる。		
	慶応元年 1865	—	—	15	文武場が開設され、統陣太鼓世話方となる。	【明治２年に記載あり】	文武場統陣太鼓世話方となる。
	慶応２年 1866	2	—	16	京都見廻組御雇七人扶持となる。	京都見廻組御雇七人扶持	京都見廻組御雇七人扶持となる。
	慶応３年 1867	2	—	17	京都見廻組火之番次席となる。		京都見廻組表火之番次席となる。
	慶応３年 1867	7	—	17	徳川 15 代将軍二条城より大阪へ退去。父とともに淀川を下る。		
	明治元年 1868	1	3	18	鳥羽伏見の戦いが起り、のち新政府に帰順する。		
	明治元年 1868	9	—	18	京都仮大学が発足、最初の入学生となる。		大学寮に通う。（「今出川寺町二條殿へ大學寮ができて其処へも一緒に通ひました」・鈴木邦定「翁の青年時代」）
	明治元年 1868	10	—	18	京都府平安隊に入隊する。	【明治３年に記載あり】	京都平安隊に入隊。（清水貞夫『俳人四明覚書四』）
	明治２年 1869	3	25	19	家督を相続する。	家督相続	家督を相続する。

区分	年号(西暦)	月	日	年齢	清水	懸葵	根本
	明治2年 1869	7	—	19	平安隊が警固方と改称、伍長となる。	【明治3年に記載あり】	平安隊が警固方と改称、伍長となる。
	明治2年 1869	—	—	—		幼名勇藏ト称シ後登代藏ト改ム 御番見習被仰付(雄藏) 稽古場劍術世話役申渡（登代藏） 文武場統陣太鞍世話方	
	明治3年 1870	7	—	20	東京へ遊学のため、京都府警固方を退く。 このとき安井息軒の三計塾に学ぶ。		東京に遊学、安井息軒の三計塾に学ぶ (『覚書』)
	明治3年 1870	—	—	—		平安隊へ入隊 警固方伍長	
	明治3年 1870	12	—	20	普仏戦争の状況を、官版の新聞で知り京都に戻る。		官版の新聞で普仏戦争を知り京都に戻る (『覚書』)
	明治4年 1871	2	—	21	改めて京都府警固方に入る。		
	明治4年 1871	3	—	21	京都府欧学舎独逸校に入学する（～七年まで)。 独逸人教師ルドルフ・レーマンに学ぶ。ここで雨森菊太郎と出会う。		京都府欧学舎独逸校(『履歴』、『略伝』では京都中学独逸語学）に入学する(～七年まで)。独逸人教師ルドルフ・レーマンに学ぶ。
	明治4年 1871	—	—	—		当府補亡手申付鞠獄掛随勤京都府 依願補亡手差免	
	明治4年 1871	(10) ～ (12)	—	—		10月　邏卒申付京都府 10月　依願邏卒差免候事 12月　地券書調申付候事	
	明治4年 1871	12	26	21	姉加寿、亀山藩士杉山巌と結婚する。		
	明治5年 1872	6	—	22	京都府貫属士族となる。	当府貫属士族申付候事京都府	京都府貫属氏族となる。
	明治5年 1872	—	—	22	この年、京都府卒明細短冊に、登与藏改め重麗と記す。欧学舎で「和訳独逸辞書」の編集に加わる。		この年、京都府卒明細短冊に、登与藏改め重麗と記す。欧学舎で「和訳独逸辞書」の編集に加わる。 (『覚書』)

区分	年号(西暦)	月	日	年齢	清水	懸葵	根本
	明治6年 1873	9	—	23	(和訳独逸辞書完本二冊本が出版される。)		
	明治6年 1873	9	—	23	独逸学校（欧学舎）舎長心得となる。	独逸學校舎長心得	独逸学校舎長心得となる。
【Ⅱ期】	明治8年 1875	1	13	25	京都府等外四等出仕、勧業課付属となる。ここで明石博高と出会う。	等外四等出仕申付候事勧業課付属	京都府等外四等出仕となり、勧業課付属となる。
	明治8年 1875	(8)	(17)	—		8月17日　等外三等出仕	
	明治8年 1875	12	13	25	京都府等外一等出仕、勧業課医務掛となる。	等外一等出仕勸業課医務掛申付	京都府等外一等出仕勧業課医務掛となる。
	明治8年 1875	—	—	25	煎茶道小川流二代目其楽の長女久江と結婚する。		煎茶道小川流二代目其楽の長女久江と結婚する。
	明治9年 1876	1	18	26	京都府十五等出仕、学務課勤務となる。	十五等出仕學務課申付	1月8日　京都府十五等出仕学務課勤務となる。【清水は1月18日】
	明治9年 1876	(1)	(31)	—		1月31日　補京都府十三等出仕	
	明治9年 1876	2	26	26	養父重興死去する（58才）。		
	明治9年 1876	6	—	26	師範学校が設立され、理化学担当教諭となる。		師範学校が設立され、理科学担当教諭となる。
	明治9年 1876	9	—	26	(京都府発行「物理雑誌」の編集人となる。(～10年5月廃刊)（明治文化全集))		
	明治10年 1877	—	—	27	(この年、京都府蔵版「小学読本博物学階梯」を著す。(京都出版史))		
	明治10年 1877	(2)	(22)	—		2月22日　任京都府七等属學務課申付	
	明治10年 1877	7	—	27	(京都府発行「萬有雑誌」の編集人となる。(～14年2月廃刊)（明治文化全集))		
	明治10年 1877	10	—	27	第1回内国勧業博覧会を見学のため東京に出る。		第一回内国勧業博覧会を東京で見学。
	明治10年 1877	12	6	27	旧仙洞御所広場で、学務課製作の軽気球をあげる。		先洞御所広場で学務課制作の軽気球をあげる。

区分	年号(西暦)	月	日	年齢	清水	懸葵	根本
	明治 10 年 1877	(8)	(31)	27	京都府蔵版「小学読本博物学階梯字引を著す。 【字引は明治 11 年刊行、階梯の刊記との取り違えではないか】		8 月 31 日　『小学読本博物学階梯』(京都府蔵版・譯術者、京都府士族、中川重麗) 刊行 【8 月 31 日出版権所有とある。刊記には 11 月刻成とある】
	明治 11 年 1878	3	—	28	舎密局で技師ワグネルのドイツ語通訳を行う。		舎密局で技師ワグネルのドイツ語通訳をする。
	明治 11 年 1878	8	12	28	師範学校二等助教兼務となる。	師範學校二等助教兼勤	師範学校二等助教兼勤となる。
	明治 11 年 1878	—	—	28	この年、「小学課業に物理書を増加するの建言」が、即日知事の許可となる。 「萬有家塾」を開き、ドイツ語、科学知識の普及に努める。		「小学課業に物理学を増加するの建言」が知事の許可を得る。 「萬有家塾」を開き、ドイツ語科学知識の普及に努める。
	明治 12 年 1879	—	—	29	(この年、「小学理学階梯」巻一・二を出版する。)		
	明治 12 年 1879	—	—	29	(この年、「小学理学階梯字引」を出版する。)		
	明治 12 年 1879	4	19	29	博覧会品評人部長となる。	博覧会品評人部長	博覧会品評人部長となる。
	明治 12 年 1879	9	—	29			『小学理学階梯字引』(中川重麗張弛館) 刊行。
	明治 12 年 1879	11	—	29	(「改正博物学階梯字解」を出版する。)		『改正博物学階梯字解』(中川重麗張弛館) 刊行。
	明治 13 年 1880	—	—	30	(この年、「博物学階梯教授本」を出版する。)		
	明治 13 年 1880	—	—	30	(この年、「改定増補博物学階梯教授本」を出版する。)		
	明治 13 年 1880	(9)	—	(30)			『萬有七科　星學』(中川重麗譯　京都府) 刊行。
	明治 14 年 1881	—	—	31	(この年、「農家小学読本」を出版する。)		
	(明治 4 年) 1881	(5)	(1)	—		5 月 1 日　師範學校七等助教兼勤 【明治 4 年とあるが、明治 14 年か】	

区分	年号(西暦)	月	日	年齢	清水	懸葵	根本
	(明治 4 年) 1881	(7)	(15)	—		7 月 15 日　六等属依願免本官 【明治 4 年とあるが、明治 14 年か】	
	明治 14 年 1881	(7)	(16)	(31)		7 月 16 日　府立師範學校五等教授申付	7 月 16 日　府立師範学校五等教授となる。
	明治 14 年 1881	(9)	(1)	—		9 月 1 日　任京都府六等属師範學校六等助教兼勤	
	明治 14 年 1881	9	—	31	「体育演舞場設立」を府に建言、十二月に開場となる。		「体育演舞場設立」を府に建言。十二月開場。
	明治 15 年 1882	—	—	32	(この年、「工業小学巻一・二」を出版する。)		
	明治 15 年 1882	(2)	—	32	(この年、「農家小学読本字解」)		『農家小学読本字解』(中川重麗杉本甚助) 刊行。
	明治 15 年 1882	2	26	32	京都府御用掛となる。	京都府御用掛申付候事	京都府御用掛となる。
	明治 16 年 1883	2	—	33	大日本農会京都支部常置委員に選任される。		大日本農会京都支会常置委員に選任される。
【Ⅲ期】	明治 17 年 1884	—	—	34	(この年、「新撰博物小学巻一・二」「小学植物標本説明書第一編」を出版する。)		
	明治 17 年 1884	(1)	(4)	(34)		1 月 4 日　任京都府立五等属	京都府五等属に任ぜられるが九月二日辞職する。
	明治 17 年 1884	4	—	34	レーマン会を組織し、私立独逸学校設立校主となる。	大日本農會京都支會常置委員ニ選任セラル	
	明治 17 年 1884	(9)	(2)	34		9 月 2 日　五等属依願免本官	
	明治 17 年 1884	9	8	34	東京大学予備門御用掛、教員勤務となる。ここで杉浦重剛と出会う。	東京大學豫備門教諭御用掛申付教員勤務申付	東京大学予備門御用掛申付られ教員勤務となる。
	明治 17 年 1884	11	18	34	東大医学予備学校嘱託となる。	醫學豫備學校嘱託	東大医学予備学校嘱託となる。
	明治 18 年 1885	7	—	35	(東京大学予備門が特立、九月に教諭となる。)		
	明治 18 年 1885	(9)	(22)	(35)		9 月 22 日　任東京大學豫備門教諭	東京大学予備門教諭に任ぜられ、杉浦重剛と出会う。

区分	年号(西暦)	月	日	年齢	清水	懸葵	根本
	明治 19 年 1886	—	—	36	(この年、シルレルの「維廉得自由之一箭」を訳出、出版社（大阪）から刊行予定が中止となる。のちに雑誌「少年文武」の附録とする。(明治二三年))		
	明治 19 年 1886	5	25	36	東大予備門廃止となり、第一高等中学校教諭となる。	任第一高等中學校助教諭	東京大学予備門が廃止となり、第一高等中学校教諭となる。
	明治 19 年 1886	6	1	36	第一高等中学校を非職となる。	6 月 11 日　非職申付 【清水は 6 月 1 日とする】	第一高等中学校を非職となる。
	明治 19 年 1886	6	—	36	通俗学芸社（大阪）を設立、学術雑誌を発行する。(通俗学芸社（大阪）を設立「「通俗学芸志林」を発行する。(明治文化全集五))		
	明治 19 年 1886	7	—	36	(通俗学芸志林（第二号以下）に、「美人薄命麒麟夢妃児徳」を訳出する。)		
	明治 19 年 1886	8	—	36	日本絵入新聞社（大阪）に入社するが、11 月廃刊となる。	大阪ニ於テ著述業ニ従事	
	明治 19 年 1886	10	—	36	(通俗学芸志林（第 5 号）に「滑稽演劇支那皇女虎姫」を訳出する。)		
	明治 19 年 1886	—	—	36	(通俗学芸志林（第 7 号）に「沙漠旅行物語」「維納の春美術の苑小哲学士」を訳出する。)		
	明治 20 年 1887	2	—	37	ハウフ作「砂漠旅行亜垃比亜奇譚」が出版される。		ハオフ童話の初訳『砂漠旅行亜垃比亜奇譚』(独逸國學士ハオフ氏原著、日本霞城山人譯) 出版。
	明治 20 年 1887	4	—	37	杉浦重剛の紹介で、山県悌三郎と大阪で会う。		
	明治 20 年 1887	(6)	—	—		日本新聞社へ入社 【『覚書　参』では、「明治 22 年 2 月新聞「日本」が創刊、編集に加わる」とある】	

区分	年号(西暦)	月	日	年齢	清水	懸葵	根本
	明治 20 年 1887	7	—	37	学術雑誌「学海之指針」(東京) が創刊され、編集人となる。		『学海の指針』(東京・學海指針社) 編集人。二四号、二五号、二六号、二八号に「ヘルバルド氏の教育学要略」連載(中川重麗)。
	明治 20 年 1887	—	—		巌谷小波と出会う。		

6　まとめ

以上,『博物学階梯』の著者である中川重麗について，理科教科書執筆者としての事績の整理を試みた。『博物学階梯』は理科分野の語彙の使用の試行錯誤を観察できる資料として注目に値する。中川の経歴をみると，欧学舎独逸学校でレーマンから，ドイツ語と科学知識を学んだが，その学びはただ独逸学校の学業によるものだけでなく，護衛として外出に帯同したり，ドイツ語辞書の作成を手伝ったりと，公私に渡ってレーマンに付き従い生活したことも大きかったのではないか。また，京都府職員としてワグネルの通訳を務めるなどの機会もあり，京都にいたお雇いドイツ人らとの関わりが深いことがわかる。京都のお雇いドイツ人と関わりがあった他の日本人との交流の中で，さらに知識が交換され，使う言葉も試行錯誤され，洗練されていったことだろう。当時，近代化と発展を目指し，科学知識普及を推し進めていた京都府の職員であったことが，中川の科学知識及び語彙の獲得に大きく影響を与えただろう。明治 20 年代までの京都において，独逸学校や，お雇いドイツ人らのほか，京都府行政の人々との交流から，中川が学んだ知識が,『博物学階梯』など，複数の理科教科書の執筆に生かされたのではないだろうか。

［注］

1）伊藤（2019.3b）において，『博物学階梯』シリーズのうち，『改正増補博物学階梯教授本』の語彙について調査・考察している。

2）「大亦墨隠（～明治 14 年）書家。姓は紀氏，諱は元韶，字は丸成，墨隠と号した，通称は大亦韻平。紀伊の人書を三瓶信庵に学び一家を成し衣棚御池北において子弟の教授に当った。室の繍蝶女史も南画を能くした。明治十四年一月二十六日没，年六十五。知恩院山内一心院に葬る。（慶應三 書（漢））」
http://lapis.nichibun.ac.jp/tanzaku/index.html（2019 年 9 月 19 日閲覧）国際日本文化研究センター HP，平安人物志短冊帖データベースにて閲覧可能。

3）レーマンはドイツのカールスールエの工業大学の土木工学科で河海工業と土木工学を専攻し，オランダ・ロッテルダム造船所に勤務していたが，来日後は大阪で兄のカールが経営していたレーマン・ハルトマン会社に勤めていた（西野ほか（2016），pp.231–233）。

4）樋口摩彌（2014），pp.89–90。

5）「（中略）明石博高（1839–1910）によって編纂され，化学書 1 冊，磁器の改良に関する書 3 編が刊行された。」（小澤（2015），p.107）

［謝辞］本研究にあたり，鈴木栄樹氏（京都薬科大学名誉教授）には，京都での中川の事績調査において，種々ご教授を賜った（墓所がある高山寺ほか関係地案内，御所蔵書の閲覧，経歴・事績に関する情報ほか）。深く感謝申し上げます。

［付記 1］本稿は，学習院大学東洋文化研究所 2018 年度一般研究プロジェクト「日本近代漢語表現の形成とアジア漢語圏近代漢語との比較研究」（代表：安部清哉）の研究成果の一部である。

［付記 2］本稿は，次の口頭発表を経ている。第 214 回青葉ことばの会口頭発表，題目：「近代語資料としての明治理科教科書・中川重麗『博物学階梯』―明治 10 年刊初版を中心に―」，発表者：安部清哉・伊藤真梨子・蓮井理恵・渡辺陽子，2019 年 9 月 21 日，学習院大学北 2 号館。

［付記 3］本稿は，安部清哉の次の科研費の研究成果も含む。日本学術振興会科学研究費 2017–2019 年度基盤研究Ｃ（基金），課題番号：17K02785，代表：安部，「古典日本語の連語構成・詞辞複合表現形式の通時的基礎研究」。

［参考文献］

【書籍】

小澤健志『お雇い独逸人科学教師』，青史出版，2015 年。

清水貞夫『俳人四明覚書　続』，私家版，1993 年。

清水貞夫『俳人四明覚書　参』，私家版，1996 年。

清水貞夫『俳人四明覚書　四』，現代文藝社，2007 年。

清水貞夫『俳人四明覚書　五』，現代文藝社，2011 年。

清水貞夫『俳人四明覚書　六』，現代文藝社，2013 年。

清水貞夫『四明中川重麗小事典』，現代文藝社，2015 年。

清水貞夫『俳人四明覚書　七』，現代文藝社，2018 年。

飛田良文他編『日本語学研究事典』，明治書院，2007 年。

日本国語大辞典第二版編集委員会編『日本国語大辞典第二版』，小学館，2002 年。

【雑誌】

『懸葵』第 14 巻第 5 号故四明翁追悼号，懸葵発行所，1917 年。

【論文・記事】

東徹「明治中期の少年雑誌における科学ジャーナリストの役割：中川重麗の場合」，『科学史研究』，第Ⅱ期第 25 巻（No.160），日本科学史学会，pp.245–254，1987 年 6 月。

伊藤真梨子「語基『特』を含む漢語の幕末・近代における拡大」『人文』第 17 号，学習院大学人文科学研究所，pp.115–152，2019 年 3 月 a。

伊藤真梨子「『改正増補　博物学階梯教授本』（1880）の語彙」『国語国文学会誌』第 62 号，学習院大学文学部国語国文学会，pp.38–25，2019 年 3 月 b。

神辺靖光（2007）「学区の思想（17）」『1880 年代教育史研究会　ニューズレター』19 号，1880 年代教育史研究会，pp.2–3，2007 年 10 月。https://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/1880/letter/1880Newsletter19.pdf（1880 年代教育史研究会 HP にて閲覧可能、2019 年 9 月 16 日閲覧）

古賀勝次郎「安井息軒の生涯 - 安井息軒研究（2）-」『早稲田社会科学総合研究』第 8 巻第 2 号, 早稲田大学社会科学学会, pp. 1–21, 2007 年 12 月。

古賀勝次郎「安井息軒の門生たち（1）- 井上毅 : 安井息軒研究（6）」『早稲田社会科学総合研究』第 10 巻第 2 号，早稲田大学社会科学学会，pp. 29–49，2009 年 12 月。

榊原正義「明治期京都におけるドイツ語教師ルードルフ・レーマンの事跡」『醫譚』復刊第 96 号（通号第 113 号），日本史学会，pp.58–69，2012 年 12 月。

鈴木永樹「京都私立独逸学校の初代校主中川重麗（四明）：忘れられた近代京都のマルチタレント」，『京薬論集』，第 24･25 号，京薬論集刊行会，pp.5–28，2019 年 3 月。

飛田良文「独逸学資料」，『日本語学研究事典』，明治書院，pp.1083–1084，2007 年 1 月。

中川重麗「京都に於ける獨逸學（一）」，『Hand in Hand』，第 3 巻第 3 号，南江堂書店，pp.28–29，1915 年 3 月。

中川重麗「京都に於ける獨逸學（二）」，『Hand in Hand』，第 3 巻第 5 号，南江堂書店，pp.31–32，1915 年 5 月。

中川重麗「京都に於ける獨逸學（三）」，『Hand in Hand』，第 3 巻第 7 号，

南江堂書店，pp.31–32，1915 年 7 月。
西野武志・鈴木栄樹「草創期の京都の薬学教育とルドルフ・レーマン」，『薬学史事典』，日本薬史学会，薬事日報社，pp.231–233，2016 年 3 月。
根本文子「中川四明年譜考証」,『東洋大学大学院紀要』, 第 48 集（文学（国文学)），東洋大学大学院，pp.1–29，2011 年 3 月。
蓮井理恵「近代漢語「自然物」「天然物」「天産物」「天造物」類の変遷と意味分析―」『人文』第 17 号，学習院大学人文科学研究所，pp.153–185，2019 年 3 月。
樋口摩彌「明治前期の京都新聞史に関する基礎研究 : 新聞・雑誌の所蔵調査に基づいて」，『書物・出版と社会変容』，第 17 巻，書物・出版と社会変容研究会，pp.77–101，2014 年 10 月。